

アーティスト・イン・レジデンスの現在 ——グザヴィエ・カワートポール インタビュー 山村浩二

本稿は、東京藝術大学大学院映像研究科公開講座「馬車道エッジズ コンテンボラリー・アニメーション入門」現代短篇アニメーションの見取り図」第二十九回（二〇一八年七月十五日）をもとに構成した。

山村 今回の回は「アーティスト・イン・レジデンスの現在」ということでフランスのフォントヴロー修道院文化センター、元所長のグザヴィエ・カワートポールさんをお迎えしています。

カワートポールさんは、フォントヴロー修道院文化センターで、アニメーションの作家に特化したアーティスト・イン・レジデンスを

十一年ほど続けてこられました。本日は六本の作品の成果を見ていただきながら、修道院のアーティスト・イン・レジデンスをご紹介します。現在さらにいくつかの国でアニメーションに特化したアーティスト・イン・レジデンスが始まっている、そのネットワークもでき始めているので、その辺りのお話もお聞きしたいと

思います。アニメーションを制作したい人にとっては大変実利があり、有意義な会になるのではと思っています。通訳は、長年いろいろとグザヴィエさんのお手伝いもされていて、本校の特任准教授のイラン・グウェンさんにお願ひしています。

カワートポール 皆さん、こんにちは。このたびのご招待に感謝いた

します。

山村さんとはもう二十年近く前から面識があります。私は以前、パリのフィルムセンター、フォーラム・デ・イマージュというところで日本のアニメーション映画を取り上げる映画祭をプログラムしておりました。その一環で山村さんをゲストにお迎えしました。今日も会場にいらつしやる中にも、同じ映画祭にお迎えした方々のお顔が見えます。大変懐かしい小田部（洋一）さん、片渕（須直）さん、伊藤（有孝）さんも来てくださり光栄です。ありがとうございます。

今日、皆さんにフォントヴロー修道院でのレジデンスのお話ができることをとてもうれしく思っています。

象徴的な意味を持つ修道院

山村 私自身もこちらのレジデンスが始まったところから、何度か招待いただいています。が、長期間日本を離れることが難しく、二〇一一年に一週間の連続ワークショップの講師という形でこちらの修道院を訪れました。

フォントヴローは、フランスで一番美しい村とも呼ばれています。訪れたのが大変気候の良い時期でしたので、まわりの風景のどこを見てもきれいで、咲いている花を見て涙が出るという経験をしました。その修道院はナポレオンが刑務所として利用していたことでも知られていて、修道僧のように、もしくは囚人のように外界か

ら情報を遮断され、その中でさまざまなアイデアを練ることができるといふ本場に面白い環境です。カワートポール こういう歴史的記念建築物とアニメーション映画という、ちよつと特殊な出会いをご紹介しますために、いくつか画像を持ってまいりました。

フォントヴロー修道院は西フランス、ロワール川流域の近くに位置していて、場所としても象徴的な意味でも、フランスでもっとも重要な大きな記念建築物の一つです。もともとは十二世紀初頭に建てられた、修道院というよりも、修道都市というべきところ。四つの修道院が隣同士で建てられて一つの大きな修道都市を成し、歴史的に何世紀にもわたって、フ

堂を使って「これは食事だよ」というテーマで、特殊な食事のとり方のイベントが開催されました。あるいは、クロード・レヴェックという有名なフランス人の現代芸術家が大きな共同寝室の中に、ロワール川にあった船を持ってきたインスタレーションを作ったこともあります。移動型の、大道芸人たちがテーマとした『散歩道』というインスタレーションをフランス人のアーティストが作り、展示したこともあります。毎年コンサートシーズンの設定されていて、クラシック音楽などの録音の場としても使われています。

このようなフロントヴロー修道院文化センターに、代表として着任するに際して、歴史あるこの偉

大な場所にもう一つ、アニメーション映画も取り入れようと提案しました。当時のフランスでは、歴史記念建築物の中でアニメーションを取り上げるといことはわりと独創的な発想だったようです。

つくり手たちに場所を与える

カワトボール 十年前もいまも変わらないと思いますが、フランスにおいて、特に多くの独立系のつくり手たちは、ほかの仕事を持ち、教育関係の仕事や委託の仕事などをこなしながら、自分の作品を構想することがなかなか時間的にも予算的にも難しい状況に置かれています。そこで、発想から形ある企画へと自分のアイデアをま



修道院身廊

とめるための時間を与える意味で、つくり手たちを招待するのがいいのではと思ったのです。基本的なかたちは、数人のつくり手を招待して一カ月滞在してもらい、渡航費と滞在費をして一カ

ランスにおいてのみならず、ヨーロッパにも大変重要な影響力を持った場所です。

この修道院では暮らしの貧しさ、あるいは厳しさというある意味での修行が一方にありながら、他方では大変影響力の強い、そして豊かな、お金持ちの場所でもあり、王権との密接な関係もありました。つまり一方に宗教があり、他方に権力が存在していました。

修道院の一番大きな中心は、中庭の回廊です。この修道院には一番多いときには四百人もの尼僧が暮らし、外の世界と一切関係を持たず、その場所で一生を送りました。いまだに謎が残っている場所です、考古学者などの専門家たちにもまだ究明されていないところが

あります。修道院はフランス王家、イギリス王家、両方の庇護の下にありました。修道院の中のお墓にはアキテーヌという地方のアリエノールという女性、フランスの女王になり、のちにイギリスの女王にもなるという数奇な運命をたどった女性と、彼女の二人目の夫であったアンリ二世、獅子王リチャードのお父さんの遺骨が残っています。

芸術センターとして

カワトボール この修道院はロワール川流域のお城の観光コースにも入っていて、この地を訪れる人々の多くがやはり修道院を訪れます。また一方、文化センターと



一二世紀ロマネスク様式の修道院

して、あるいは芸術センターとしての活動もあります。多くのアーティストを迎えて、芸術関係のイベントが年間を通して開催されているのです。

例えば、昔のお坊さんたちの食

月のギャラのようなお金も払い、この期間ほかのことを何も考える必要もなく、次作の準備だけに専念できるような場を提供することです。アトリエ、すなわち仕事場として、昔の偉いお坊さんたちが住んでいた建物の部屋を提供します。かなり恵まれた場所で、そしてインスピレーションがいろいろ湧いてくるような場所でもあるかと思っています。十分ほどのレジデンスに関するドキュメンタリー映像がありますので、それを見ていただければと思います。

山村 僕も一週間ほど滞在しましたが、すごく簡素な部屋で、居心地のいい宿泊施設とレストランも併設していたり、敷地にはホテルも作られていて素晴らしい場所

です。インターネットはホールにしかなく、意図的に外界からの情報が遮断されています。ご覧いただく短いドキュメンタリーには滞在した作家たちのインタビューも収められています。

* 以下、上映された映像より

アン・ル・ノルマン フォントヴロー修道院での、アニメーション映画の企画・構想のための国際レジデンスは約十年前から始まりました。毎年十月、世界中からアニメーション映画の作者を迎えます。十年で約二十八カ国の国籍の人たちを迎えました。今年は九つの国から、十本の企画が選ばれま



ワークショップ風景

した。選ばれる企画は、最初の段階、つまり発想や構想から、形ある企画にしていかなければならない段階のものです。(Anne Le Normand : 非営利団体NEFアニメーション企画担当スタッフ)

アンドレア・シュナイダー 最初に来たときは、テーマしかなかったのですが、まだあまり具体的ではなく、感情のようなものでした。ここでそのテーマについて調査研究する時間を取りたかったし、ここで十分資料を集めたあとは、それに基づいてストーリーを考えています。(Andrea Schneider : 監督、スイス)

アリックス・フィゼ みな、それぞれの目標を持っていて、それぞれのリズムで進んでいます。応募が半年から一年前だったりするので、途中で企画が発展している場合もあります。それぞれのステップに立っていますから、私は執筆中ですが、ほかの人は絵コンテを描いたりしています。(Alex Fiset : 監督、フランス)

ジュステイヌ・ヴィルステケル 私は撮影の準備のために滞在しています。ピン・スクリーンという特殊な技法を使います。撮影するのはピンではなく、その投影された影です。五〇年代にアレクセイエフとそのパートナーのクレア・パーカーが開発した技術です。撮影期間は半年を予定しています。ピン・スクリーンという技法と、私だけがいてほかに誰もいないという状況では、脱線したり、妄想したり、即興の可能性が大いにあるので、事前によく準備をする必要があります。枠組みを作って、迷子にならないように準備しなければなりません。この滞在の狙いは、そういった構成を作ることです。(Justine Vuytacker : 監督、フランス)

マラ・チェッリ いろいろなテストや異なった技法の実験、例えば、透明なプラスチックのセル画にバックライトを使って描いてみたりしています。(Mara Cerri : 監督、イタリア)

ロブ・フェルヴェーク ここフォントヴローでやってきたことは、主にこれまで描いたいろいろなスケッチを解体して、ある物語を構成することです。順番を考えたり、パズルのように断片を眺めて組み立てたり、バラバラにしたり。まだ軽く揺れるような絵コンテを編集する作業です。次のステップは、自分の企画を十分他人に紹介できるぐらい進めたところで協力者を集めることです。(Robbe Verwilt : 監督、ベルギー)

ことです。以前から、もっと個人的な作品を作りたいと思っていたのですが、どうしてもほかの優先事項ができていたりして、時間が足りず、ここに来られたことは最高です。本格的に次作をスタートさせることができたのです。私にとってそれが一番の難題でした。

フィゼ 昨年この映画を執筆し始めたとき、スタジオでの仕事と作品の準備はやはりなかなか両立しないと痛感していたので、一カ月間純粹に執筆に時間を使って、ほかに何も考えなくてもいいという状況が魅力でした。

ル・ノルマン こちらのレジデンスでは奨学金も出て、監督や作家が実際に、本当に解放されます。それに共同の作業場、共同の生活

場と個人の部屋があります。

選ばれるのは、送ってもらった企画の資料と業界の人などで構成された選考委員によってです。またいろいろな映画祭とパートナーシップが組まれていて、受賞するとレジデンスにも選ばれます。例えばアンジェーの「プレミエ・プラシ」映画祭、アヌシー国際アニメーション映画祭、モロッコのメクネスの映画祭などとそういうパートナーシップを結んでいます。

ヴィルステケル ここに来た時点で、企画は提出してあり、選考過程である意図によって選ばれている。選考委員がすでに私の企画の方向性に可能性を与えてくれているので、他人に対しても自分に対しても、企画の正当性を訴えたり、

考え直す必要はまったくないのです。例えばこのスケッチ帳は、自宅で始めていたら二ページで終わっていたかもしれませんが、ここに来て、撮影のための準備が必要だと求められたので描ききれませんでした。描いている間はその場、そのときの直感などに身を任せていることができました。

クリシュナ・チャンドラン・A・ナイル いま私はVコンテの作業をしています。前の構想の段階では、修道院の中をあちこち、うろろろしていました。(Krishna Chandran A.Neil: 監督、インディアン)

ヴィルステケル ここのもともとしも歴史観に溢れているので、自分のアイデア、企画がうまくいかず、スランプに陥って、生

フィゼ いまはこの準備にとりかかっています。プロデューサーたちですでにストーリーを伝えてあって、向こうが待っている状態です。音楽家にも連絡をとって、これからアシスタントアニメーターを務める人に連絡します。もしもレジデンスに来ていなかったら、夏休みの時期を待つとか、あるいはオフの日を使うしかなくて、同じ成果のために三、四倍の時間がかかっていたことでしょう。

ル・ノルマン 人にはそれぞれ作り方、作業の仕方がありますが、誰にとってもこの構想の期間はたいへん重要で、一人になる、まわりから何もなくて、自分自身の中に掘り下げる、自分に対面する必要があります。

モイーン・サマディ 私と妻はイランで小さなスタジオを持っています、アニメーションのコマーシャルや短編を作っています。ですがテヘランは大会で汚染も、雑音や道路の騒音などもあり、そういう状況下ではなかなか思うように作業ができません。(Mo'in Samadi: 監督、イラン)

フェルヴェーク 私が普段仕事をしているアトリエも大変いいですけど、ほかの人も作業しているにぎやかで、郵便配達やEメールにも対応しなければなりません。それにアニメーションを教えるもあります。毎日さまざまな義務とか雑用に追われています。フォントヴローで良いのは一カ月丸々、それらが消えるということです。次作

に100%専念するため、このレジデンスに応募しました。

シュナイダー 一カ月間、お金のためにしなければならぬことから解放されて、全力で自分の作品に取り掛かれるのは大変ありがたい



修道院内の個室

ダンス・プログラムもかなり知られるようになってきて、年間に二百人ほどの応募があり、毎年十本の企画が選ばれます。選ばれたレジデントの人たちには同じ時期に来てもらいます、共同生活の中で、出会いがあり、いろいろな刺激的な交流の場になるように設定しています。

選考委員会がどういう基準で企画を選ぶかと申しますと、一番大きいのはやはり芸術性、創造性です。作品について、これからどう開発するのか、なにを構想しているのか、そのアイデアの理由を応募者に書いてもらいます。

ご覧のとおり、美しい場所ですがいろいろなものから離れて、数百人の村で一カ月過ごすという覚

悟が必要です。企画案には、例えばプロデューサーや予算面の案は一切必要ではありません。もちろんそういうものが付いていても結構ですが、最初の発想段階の企画で、実際に制作可能かどうかということを判断するにはまだ早すぎます。だから応募条件としては求めています。

フォーマットに関しても規定はなく、短編でも長編でもテレビシリーズでも、あるいはマルチメディア系の作品でもすべて対象になります。とはいえ実際の応募の多くは、自作の構想を考えて、それを作家自身が監督するというパターンが非常に多く、大多数はやはり短編の企画です。美学的な様式などは非常に多様で、本日これか

ら上映される作品で、そのこともご覧いただきましょう。

山村 では最初に『チューリエン、鳥の物語』と『クモの巣』という二本の作品です。

『チューリエン、鳥の物語』はやや長い作品でちよつと難解な部分もありますので、先に簡単に解説をします。僕が審査員だった二〇一五年の文化庁メディア芸術祭で賞を取っていますので、そのときにご覧になった方もいらっしゃるかもしれません。「チューリエン」というのは半分人間、半分カラスの精霊の名前で、このお話は北米神話、ネイティブ・インディアン

の伝説のエピソードに基づいて作られています。「チューリエン」を追いかける三人のシャーマンが物

産性が上がらないときには、それを受け入れ、庭にきて少し過ごしたり、本を一冊持つてきてもいいし、人やら壁そのものを眺めたりすればいいのです。はるか遠くの過去に意識を飛ばさずにいられますし、ときには別の時代を実感する瞬間もあります。

エマ・ヴァカレロヴァ とても刺激的です。自分の作品に取り掛かるために、ある意味で自分を閉じ込めるためにここに来て、自分のアイデアとだけ対面していればいい。そして同時にやはり開かれた場所であり、常にほかの人々と一緒に過ごせるし、ユニークな雰囲気です。(Emma Vakarova: 監督、ブルガリア)

ナイール一緒に料理を作ったり

することも文化交流になります。毎日誰かが自国の料理を作ったり、一緒に森を散歩したりします。

ソフィー・カンブマーク 誰もが言うことかもしれませんが、この人たちとこの場所が本当に大好きになりました。多くの才能ある人たちに囲まれて、さまざまなアプローチや企画を見ると、とてもかわいらしい子ども向けの作品もあれば、非常に暗く怖い作品もある。互いを芸術家としても、あるいは個人としても知ることになる。これも決まり文句に聞こえるかもしれませんが、私にとってはそれが気持ちのうえでも、実際にもすばらしい旅になりました。(Sofie Kampmark: 監督、デンマーク)

サマディ イランでは、アニメシ

ョンはわりと新しいもので、六十年くらい前からありますが断絶的にしか発展できませんでした。今度私は私たちがイランでもこのようなレジデンスを自国のアニメーション映画の発展のために作りたい、と妻と一緒に考えています。

ヴィルステケル 作品のイメージはいくつかのシーンをなんとなく想像してはいましたが、レジデンスのおかげで形を帯びてきました。いまはもう、撮影に取り掛かる準備ができています。

※上映終了

レジデントの選考基準

カワトボール いまやこのレジ

語の中心です。非常に荒削りで、すぐくダークな部分と、その神秘的なユニークさ、精霊の傍若無人な振る舞いが面白い作品になっています。

『クモの巣』の監督はナタリア・チエルヌシヨフヴァというロシアの若い人です。日本でも文化庁主催の「A-AIR」というアニメーション制作のアーティスト・イン・レジデンスがありますが、僕がメンターとして作家を選ぶような立場にあったときに応募されたのがこのナタリアさんでした。日本でのレジデンスでもこの作品『クモの糸』の構想を始めていて、そのあとフォントヴローで発展させた。アーティスト・イン・レジデンスを渡り歩きながら生活をしつつ

作品を作っていくような、ノマドアーティストみたいな人もヨーロッパなどの若い作家ではときどき見かけます。制作面でも生活面でもなかなか厳しい状況のアーティストにとって、こういったシステムはとてもありがたいものだと思います。

※映像上映『チューリエン、鳥の物語』『クモの巣』

山村 いまの作品『チューリエン』の、滞在中のスケッチをスライドで見せていただきます。

カワトボール この『チューリエン』のつくり手は二人の若い女性で、彼女たちはEugene、国立装飾芸術高等学校を出たばかりで、この



『チューリエン、鳥の物語』

作品がデビュー作になりました。応募された段階で、大変力強い目標を掲げ、非常に志の高い作品に見えたので選ばれました。

二人はカナダ北部のネイティブインディアン、原住民の人たちの住む地方についての調査も大きく展開しました。その作品世界のためのスケッチ、絵の模索も幅広く、イヌイットの絵を見ている一方、現代のアニメーション作家イーゴリ・コヴァリョフからもインスパイアされています。キャラクターのためのスケッチもお見せしましょう。

イメージボードの雰囲気は、コヴァリョフやブリート・パルンなどとの共通性がかなり目立つかと思えます。

ストーリーボードが映されていますが、お迎えするレジデントの作家たちはこちらが求めるのは開発構想の段階です。つまり、制作工程の中で実際のアニメートの作業以前の段階が対象になります。シナリオや脚本、スケッチとかキャラクターの模索、あるいは絵コンテ。そういった執筆、構成、開発に属するすべてのものです。どのように実際にアニメートされるかをあえて何も決めず、そういったものを期待しております。

もちろん一カ月だけで一本の映画の執筆や構想が完成することは非常に稀です。ただし、先ほどの映像でも言われていたように、より集中でき、より速いペースで進めることができる。そしてこの場

所の歴史、雰囲気、様式、美学的なものからの強い影響も生まれるでしょう。



『クモの巣』

この場所から受ける影響

カワトボール 滞在するつくり手の皆さんは必ずと言っていいぐらい、滞在中にその場所を描いています。例えばカナダのマルコム・サザーランドはこの建物の建築様式を見ながら描いていました。フランスの立体アニメーションの監督、ピエールリュック・グランジョン (Pierre-Luc Gangnon) という若手作家が描いたものはこのとおりです。イタリアのトッカフ・オンドさんのものもあります。こちらはポーランドのマルタ・パイエクさんですね。あとで彼の作品の一本が上映されます。

ご覧のものはちよつと特殊な様式で修道院を描いています。場所

たきます。

最初は『インボッシブル・フィギュアズ・アンド・アザー・ストリーズII』という、ポーランドの監督マルタ・パイエクさんの作品です。女性的な視点で描かれ、抽象性と具象性を併せ持った作品です。ありえないかたちの短編集IIということで、実は今年でしょ

うか、IIIが作られたのですが、まだIは作られていません。スターウォーズ方式ですね。理由は知りませんがなぜかIIから作り始めています。

作品のあと、メイキングもお見せします。

※映像上映『インボッシブル・フィギュアズ・アンド・アザー・ストリーズII』『ルミナリス』

カワトボール 『ルミナリス』という作品は本当に修道院で生まれたと言っても過言ではありません。

ファン・パブロ・ザラメッラ (Juan Pablo Zaramella) とそのパートナーのシルヴィーナ・コルニョン (Silvina Cornillon) という二人組が最初に修道院にやってきたときには、作品中にあったタンゴを元にアニメーションを作る企画でした。滞在中にそのシナリオを書いていたが、スケッチもキャラクター

としての修道院が、つくり手によっては大変強烈なインパクトを持つ場合もあります。この講座にも来たことがある、ブルガリア出身でカナダで活躍するテオドル・ウシェフ。彼は修道院とその周辺に強烈な印象を持ちました。どれだけ強烈だったかと言いますと、この修道院のみならず、その周りにある景色や村なども、『盲目のヴァイシャ』という作品の中でかなり大きく取り上げ、舞台として使われています。これらすべての景色は実在しています。例えば、この一本の木も修道院の裏にあります。

山村 では二本の作品をまた上映して、そのうちの一本の、レジデンス中に制作されたいろいろなスケッチなどをスライドで見ている。模索も当初の計画では、それまでも何度か使ったことのあるストッブモーションという技法で作る予定でした。当時のキャラクタースケッチがあります。

けれど偶然というべきか、あるとき、修道院のスタッフとともに試作を作ろうということになって、ピクシレーションの技法で作ることになりました。修道院のスタッフが写真に出ています。最初はスタッフ以外にとつてなんの意味も持たない遊びのような映像だったのですが、同じ時期に滞在していたイタリアのアニメーション作家ジャンルイジ・トッカフオンドさんが、そのピクシレーションを見て、人形で作るよりこの技法で作ったほうがいいのでは、とファ



『インボッシブル・フィギュアズ・アンド・アザー・ストリーズII』

ナ (Joaquin Cocina) という二人組も滞在していました。ここで長編の構想をして、その後『狼の家』というタイトルで完成させ、今年のアヌシーで特別賞を受賞しました。物語上の登場人物を並行して構想し、いろんな言葉とかキーワード、発想、アイデアが出てくると、それぞれのキャラクターのところにメモとして貼っています。同じスペースにもう二人のつくり手が見えます。カナダのフェリックス・デュフル＝ラペリエール (Felix Dufour-Laperrière) はチリの二人組が作業をしている傍らで、高い集中力を持って自分のパソコンに向かっています。彼は滞在中に長編の脚本を執筆しながら、キャラクターのスケッチもいろいろ

書きました。マリー＝エレヌ・テュルコット (Marie-Hélène Turcotte) というカナダ人女性はわりとよく見かける方法ですが、シナリオを書き、ストーリーボードと脚本を行き来しながら、キャラクターと絵を模索していました。技法のすべての面でやはり行き来しながら発展していききました。トレーシングペーパーや、半透明のペーパーを使ったりしていました。

フロランヌ・ミアイユ (Florence Mialhe) とマティルド・フィリポ (Mathilde Philipp) という二人のフランス人の女性は、硝子板を使った砂絵をカメラを使ってリアルタイムで壁に映写しています。そうやってモチーフを作りながら、対話するようなかたちの模



『ルミナリス』

ン・パプロさんに言ったことですっかり方向性を変えたのです。

滞在中のさまざまな作業スタイル
カワトボール つくり手たちの作業中の様子も紹介したいと思います。多くの作家を迎えて、彼らの滞在中にその作業を肩越しにのぞき、ちょっと考えることができません。皆それぞれ作業の仕方が異なり、大変多様性があります。プロセスを見ること自体、とても興味深い。

ドイツのソルヴェイグ・フォン・クライスト (Solveig Von Kries) という女性は、いわば脳内地図が必要だということで、作品に盛り込みたい全部のアイデアの道のりを見つけるためにこんなふうに壁を使っていました。

ジャンルイジ・トッカフォンド、

先ほど名前が出たイタリヤの作家は原作や題材とするバルザックの小説の文章、それにこれら写真の数々を一緒に持ってきました。直接そういった文と写真を見ながら、滞在中、実際にいろいろな画像を次々と生成していった。この地面に置いているのは第一校で、文と絵の連続性の構成ですね。

クリスチャン・ヴォルクマン (Christian Volckman) というアニメーション監督とラファエル・ティエリー (Raphaël Thierry) という画家は、二人で滞在していました。が、実際の作業過程としてはやはりアニメーション映画と絵画の間を行き来するような過程でした。

チリのクリストバル・レオン (Cristóbal León) とホアキン・コチー

索もありました。

中国のチェン・シー (Chen Xi) は切り絵のキャラクターを模索していました。アジーズ・ウームサ (Aziz Oumoussa) というモロッコ人の監督は背景美術を模索しています。メクネス国際アニメーション映画祭のパートナーシップで、毎年モロッコから一人をお迎えすることになっています。

シンポジウムとワークショップ

カワトボール このような制作工程を観察しているうちに、皆さんの滞在の時期の始まるころに、業界向けのシンポジウムという出会の場を設けることになりました。七年ほど前から開かれていま

す。フランスをはじめ、いろんな国の業界人を二日間のイベントでお迎えし、滞在しているレジデントたちにも会ってもらいます。それぞれの作り方について語ってもらいながら、彼らがどういうことをやっているのかを紹介しました。

藝大の卒業生の銀木沙織も滞在していました。またレジデンスの傍らで、一週間という集中的なアニメーションを巡ってのワークショップや講義などがあります。こちらは高畑勲監督が日本の美術史をテーマとした連続講義を行いました。高畑さんは三回お迎えしています。山村さんに来ていただいたのも、同じワークショップです。去年はミカエル・デュドク・ドユ・ヴィット (Michael Dudok de Wit)

さんが背景をテーマとした講師として来てくださいました。

アニメーション関連の展示も開催しています。一番大きかったのは二〇〇八年に開催した「グリモール・高畑・宮崎」と題した三人展。ポール・グリモーというフランス人のアニメーション監督と、日本の高畑勲監督、宮崎駿監督の関係を取り上げた展示でした。

この活動の最後の側面として、レジデンスの途中で、地元の子どもたち向けにアニメーションの作り方をテーマにワークショップを開いて、映像教育の一環としています。このスチールは女性の砂絵アニメーション作家キャロライン・リーフ (Caroline Leaf) が講師として教えていたときのものです。

山村 ここにはさまざまな建物があり、展示会場もあって本当に複合的な展開をされています。こちらの公開講座でも取り上げてきた作家もたくさん参加しています。このレジデンスの様子を見ただけでも、ここ十年ぐらいの短編アニメーションの制作状況を見渡すことができます。

では最後に二本の作品を見て、世界のアーティスト・イン・レジデンスとの関係の話をしたいと思います。韓国のチョン・ダヒ監督の『椅子に座った男』は、アヌシのグランプリを始めさまざまなアニメーション映画祭で大きな賞を受賞している作品で、グラフィックを使って哲学をしていくというような内容です。そして『ニ

ナ』はマリア・クルケル (Maria Krökel)、エマニュエル・エリアー (Emmanuel Eliah) 監督。ロトスコープを使った作品で、あとでメイキングを紹介いただきます。

※映像上映『椅子に座った男』『ニナ』

カワトポール ロトスコープを使った『ニナ』のメイキングをいくつか紹介します。最初のロケハンの背景スケッチはストーリーボード的なもので、ロケハンした写真などを元に、絵に起こしたコンテムービーです。

滞在中の二人の仕事場では、撮影された映像に絵の独特な揺れの効果を与えています。最初の試し

撮りと、ロトスコープの試作を見ると、記憶、内なる世界を輪郭をばかしたものと描いています。

成果物

カワトポール 先ほどプロデューサーが付いていることや、予算が出されていることは求められていないとお話しましたが、もう一つお断りしたほうがいいかもしれないことがあります。成果物を出さなければならぬという義務もないということです。

一カ月、自由に構想に専念すること、ほとんどの場合、滞在が加速装置として働くわけですが、滞在が終わった時点で何か提出しなければならないということはあ



『椅子に座った男』

三本ずつ、計六本の企画が選ばれて、一カ月の滞在となります。他方シネマティック・ケベコワーズというモントリオールの子ネマテークでも、三年前からフォントヴローを参考にしたレジデンス・プログラムが設立されています。少しだけ違うところはメンターが付き、指導員がフォローするというかたちで発足したことです。フォントヴローではそういった先輩や指導する立場の人が、レジデントする人を見ることがはしていません。それぞれのつくり手が自分の方向性をすでに定めていると判断していますので、一カ月の自由な滞在中でみんなが対等な立場で、お互いに刺激し合うようにと考えています。

レジデンスの相互補完
カワトボール レジデンスの立場、条件がそれぞれ違っていることが補完的な役割を果たして、片方のレジデンスを終えて、次に別のところに行くことはよくあります。例えば、先ほどのチョン・ダヒさんも最初は学生として修道院でのレジデンスに参加した後、カナダのシネマティック・ケベコワーズに行き、また修道院に戻っています。ほかのレジデンスとの建設的な関係を紹介するなら、同じフランス国内では中央地方のシクリック(CICLIC)という制作のための滞在中の機関とことで、同じ作品が渡っていくことがよくあります。

す。デンマークでもそうです。山村浩二さんの指摘もありましたが、このようにレジデンスどうしがネットワークを築いていることで、私どもにとってもある企画がどのように展開していくのかを続けて見ていくこともできますし、作品が実際に実現するためにいろんな支援をつなげることがあります。最後に今年の十月、二〇一八年十月に選ばれた十人中の九人を簡単に紹介します。日本からは折笠良さんが修道院のほうに滞在されていることになっています。山村 ありがとうございます。これほど人気になる前に、藝大からも推薦をとの相談を受けて、先ほど途中で写真に写っていた、一期生の銀木沙織さんが参加していま

りません。その一カ月で何ができたのかを各自でまとめること以外に、修道院側が何かを求めることはありません。

これまで十一年間のレジデンスを振り返ってみると、滞在してきた人たちの中で、あるいは企画の中で、六五%ぐらいは実際にその後、制作されたか、あるいはいま制作中です。フランスの制作環境としては、大変高い数字です。レジデンスで滞在できたことがデビュー作あるいは二本目か三本目、というケースが多く、若手の人たちの作品制作の助けになっています。

例えば『椅子に座った男』もそうですがチョン・ダヒさんはパリのEnsadに在学中にも学生として

お迎えしたことがあり、彼女にとっても先ほど上映した『チューリエン』の二人と同じく学校を出て最初の作品になりました。その後、グランプリを受賞しました。現時点で百八十人以上のつくり手がレジデンスで修道院に滞在してきました。国籍でいうと、およそ三十五カ国です。

レジデンスのネットワーク

カワトボール そして昨年、レジデンスのネットワークを組織し始めました。フランス国内に存在するレジデンスの多くは制作作業のためのレジデンスで、フォントヴローはその前の段階の構想ですが、現時点でこのネットワーク

に入っているフランス国内のレジデンスは八カ所あり、国外は四カ所あります。その四カ所とは、デンマークのアニメーションワークショップ、ベルギーとカナダのシネマティック、モロッコのメクネスです。

メクネスのレジデンスはフォントヴローもパートナーシップを組んで、その設立に関わりました。そこにアニメーションワークショップ、カナダ国立映画制作庁と、ベルギーのブリュッセルのANIMAという映画祭がパートナーに加わり、フランス語圏というかたちでのレジデンスになりました。フランス、ベルギー、カナダという北側の三カ国と、モロッコあるいは中東の南側三カ国から

した。

いまでは二十倍というかなり難関の高い倍率になっています。今年はめでたく藝大の二期生の折笠君が滞在をすることになりました。挑戦してみようという方は、ぜひホームページを訪れて、応募をしていただければと思います。

現在フランス国内で八カ所も、そのようなアニメーションに特化したレジデンススペースがあるというのは大変うらやましい環境です。日本では「AIR」という文化庁主催のレジデンスがありましたが、残念ながら数年前にメディア芸術というかたちに統合されています。日本ではどちらかというとフライングアートのために、国や地方自治体によって開催されてい

ることが多いですが、今後こういった映像に特化したレジデンスができたらいいなと思います。

質疑応答

質問者 A 参加される作家の方たちは制作のための道具、紙や絵の具などや、PCとかソフトウェアは各自で持ち込むのでしょうか。それともある程度は修道院に用意されているのでしょうか。

カワトボール 修道院は、設備としてはかなりの側面で中世のままです。各自が自分の道具を持参してもらうしかありません。

質問者 B ありがとうございます。トボールさんの経歴を拝見

すると歴史学を専攻とあります。

この地域は第二次世界大戦時、ノルマンディ上陸作戦が行われ連合軍とドイツ軍が戦った歴史があるかと思いますが、例えば修道院の施設が司令部に利用されたりといった現代史の暗い歴史もあるのでしょうか。

カワトボール 修道院には歴史上の黒い側面もいろいろあります。山村さんもナポレオン時代に刑務所だったことに触れましたが、第二次世界大戦においては、いわゆるノルマンディ地方からは遠く、戦線からかなり離れていたものの地方で実際の戦いがあったわけではありません。しかしナポレオン時代、つまり宗教的な建物としての役割を失ってからは、ナポレ

オンによって中央刑務所とされ、以後長い間、第二次世界大戦を越えて一九六〇年代まで大変厳しい刑務所として有名でした。

第二次世界大戦の時代の暗い話をするなら、当時この刑務所に閉じ込められた人たちの中には、レジスタンスの人たちなども強制収容されていました。射殺された人たちもいます。十九世紀、二十世紀前半まではそういった多くの苦しみの場所でした。

フランスの歴史の全般的な流れですが、フランス革命のあと、さまざまな宗教団体、とりわけ修道院などを拠点としていた団体はそこを離れなければならず、その建物は国家のものとされました。しかし国家はこのような建物をどう

管理すればいいかわからず、多くの場合は壊されたり、刑務所や軍の基地にされるなどしました。

第二次世界大戦が終わり、六〇年代になってより積極的な使い方をしようという動きになり、いろんな修道院が文化センターや創作のためのセンターになりました。もともと修道院が文化センターになった施設どうしの協力ネットワークもあります。

修道院はもともと孤独になるための場所、思考するため、精神を高めるために、あるいは知的な働きのためにできた場所です。その一方で共同体としての側面も必ずありました。いまレジデンスに来る人たちはその両方、孤独な自分に対面するという側面と、仲間

たちと一緒に過ごす共同的な側面を必ず体験するんです。つまり私たちがこのレジデンスで考えたことは、ある意味でももとの機能と非常に近いかたちを新たに考え直したことにすぎないのだと思います。

質問者 C レジデンスに参加した方の作品は、クレジットにその旨を書くことは求められるのでしょうか。

カワトボール ご指摘のとおりです。作品が完成したら、必ずクレジットにレジデンスで準備の一部が行われたということを明記する義務があります。レジデンスに来た人たちの唯一の義務です。

今日上映された作品は制作年が

異なるため、途中で修道院のロゴ自体が変わっています。ロゴは冒頭か終わりに出てくる場合もあれば、ロゴは出さずに文としてその旨が明記されることもあります。

それは私たちにとって大変重要なことで、できあがった作品が、ある意味でレジデンスの大使の役目を果たします。レジデンスで滞在した時期と、作品を完成させる時期には場合によって間に数年入ることもあります。最長記録はフランス・ミアイユさんですね。彼女は十年前、長編を執筆するために滞在して、いまようやく制作

を終えようとしているところです。

レジデンスに来る皆さんは、修道院に対する強い愛着を持つてくださるようです。最初の企画段階で来ているにも関わらず。あるいはそのためかもしれません。多くの場合、四、五年たって、あのと

きの作品がいま完成しようとしているが、どのようなクレジットにしなければならぬか、そんな連絡が入るのです。

二〇一八年七月十五日東京藝術大学映像研究科馬車道校舎大視聴覚室にて



グザヴィエ・カワトポール

グザヴィエ・カワトポール

Xavier Kawa-Topor

関連サイト：The international artist residency program
<https://nefanimation.fr/anglais/the-international-artist-residency-program/>

歴史学を専攻後、コンク中世芸術・文明欧州立文化センター、フォントヴロー修道院文化センターの所長を務めた。アニメーション映画への関心から、パリのフォーラム・デ・ジマージュで、世界中の著名な監督への「上映お任せ」、全国教育機関を紹介する「アニメーション交差点」や日本の作品を紹介した「日本の新しき映像」など、さまざまな催し物や特別上映をプログラムした。また作品の再公開などを通じて、ラディスラス・スタレヴィッチやエミール・コールなど初期の先駆者たちの再評価にも貢献した。フォントヴロー修道院では、いままで世界三十ヶ国から二百人の作り手たちを迎えた「アニメーション企画構想のためのレジデンス」を発足させた。二〇一五年よりアニメーション映画を巡って業界と連携する研究組織「NEFアニメーション」事務局長。セザール賞アニメーション部門審査委員、国立映画庁配給助成金委員会副委員長。著書には『アニメーション・ビヨンド・リアル』や『アニメーション作品100選』（フリップ・モワンスと共同責任編集）（ともに二〇一六年、Caprice出版）。